

赤井戸式土器の祖型について

大木 紳一郎

1 はじめに

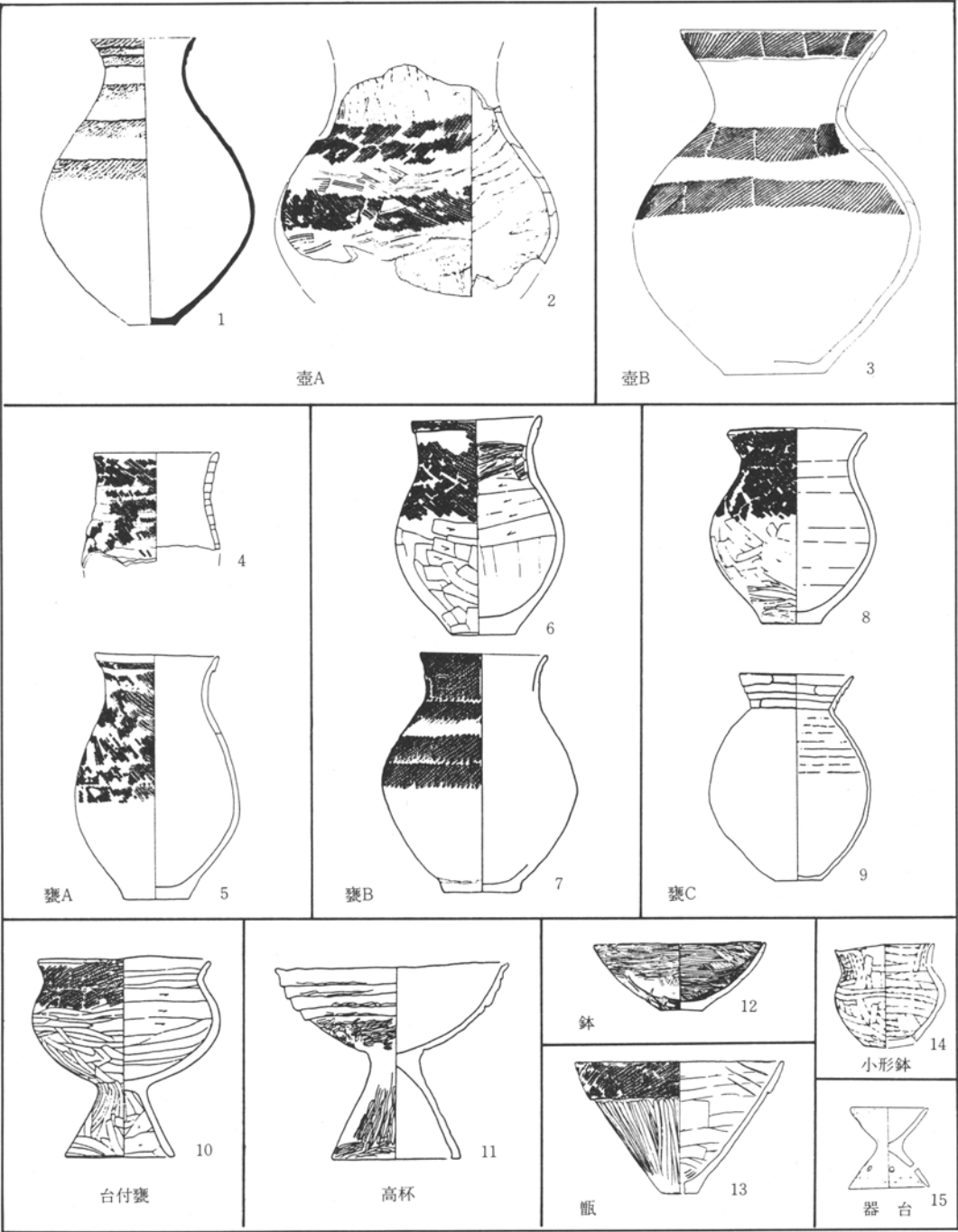
赤井戸式土器は、群馬県から栃木県にかけての小地域に分布する弥生時代後期の土器として知られる。後期ながら伝統的な縄文のみを施文するのが大きな特徴である。関東地方の他の後期弥生土器と比べて公開された資料が少ないことから、研究も停滞がちで、必ずしも学会で十分な評価を得ていたとは言いがたい。しかし、赤井戸式土器の示す特徴的な様相は、弥生時代後期に本格化する小地域文化圏の形成と展開の過程を解明する上で、興味深い内容を示している。

赤井戸式土器とほぼ同じ特徴を持つ吉ヶ谷式土器は、かなり南方に離れた埼玉県中央部の東松山市周辺の丘陵地域を中心に分布する。この両者の関係は、研究の当初から度々触れられ、現在ではほぼ同一型式の土器ではないかとの見方も生まれて来つつある。ただし、これは両者の具体的な比較検討によって明らかにされた見解ではない。又、これらの遡源の追及や、それぞれの分布圏を形成するに至った経緯などの最も重要な課題についてはほとんど解明されていないのが現状だと言える。

赤井戸式と吉ヶ谷式の関係を不明確にする大きな要因として上げられるのが、編年上における両者の位置付けの問題である。吉ヶ谷式は後期全般に位置付けられているのに対して、赤井戸式は後期の後半代に置くのが大方の認めるところとなっている。このことから、赤井戸式は吉ヶ谷式から派生したものであるとの解釈ができないわけではない。しかし、赤井戸式を後半に位置付けた根拠としては、共伴する他地域の土器の編年観によるところが大で、当地域における土器の系統的な理解から導き出したものではなかった。つまり、その編年観は前後型式との位置関係の解明や、他地域の土器編年観の見直しによって上下する可能性を多分に内在するものだと言える。従って、両者の関係を明らかにするには各々の編年の確立が前提といえよう。

小島純一氏は、赤井戸式を3期に時期区分し、第Ⅲ期におけるS字状口縁台付甕の共伴を持って、その終末段階を古墳時代前期中葉とした。これは、いかなる現象を捉えて古墳時代開始の表徴と考えるかとの認識の相違によって多少前後すると考えられるが、大きな修正の必要は考えにくく、ほぼ妥当な見解と言うことが出来る。ただし、最古段階である第Ⅰ期の位置付けに関しては、これから順次遡って後期後半に置いた感が強く、根拠としては十分なものではなかった。つまり、下限についてはほぼ固定出来るものの、上限については第Ⅰ期を最古と認めるかどうかの問題と共に流動的な解釈であったと言える。赤井戸式研究の基礎を築いた園田芳雄氏の一連の⁽²⁾論考でも、また樽式土器との対応関係から後期後半に位置付けたと解される井上・柿沼両氏の⁽³⁾解説にしても、赤井戸式の上限についてはほとんど明確な説明がされたことはなかった。

このように、上限の問題が曖昧なままに設定された赤井戸式の編年観は、吉ヶ谷式との歴史的関係を不鮮明にするばかりでなく分布地域における地域社会の変遷過程を理解するにあたって、大きな障害となるのは確かである。従って、この点を解消すべき今日の課題としては、赤井戸式の上限がどこまで遡り得るかの解明であり、吉ヶ谷式との本来の時空的位置関係を明確にする事



第1図 赤井戸式の器種と器形

だと言える。そこで、本論では以上の視点から赤井戸式の遡源解明にテーマを絞り、中期後半における新資料の分析を通して、新たな赤井戸式の系統的理解と編年の位置付けへの試論としてみたい。

2 器種と器形について

まず、赤井戸式土器の系統を分析するため、その特徴について再確認をすることにしたい。土器の器種組成や各器種の器形にみられる諸相は、編年上の組列を与えるための重要な分析要素となるが、その他に調理方法や屋内祭祀の在り方など、土器に関わる生活様式のある部分をも反映している。ここでは、この用途的側面を重視して、赤井戸式土器の各器種の特徴を見直す事にする。なお、各器種におけるプロフィールの特徴から大まかな器形の分類を試みた。これについて、小島氏は口縁形態を重視して器形細分を行ったが、口縁に見られる種々の変化はあくまでも装飾要素と考えるべきで、器形の分類基準としては偏ったものとなりがちである。従って、ここでは副次的な意味しか与えていない。

赤井戸式の器種としては、壺、広口壺、甕、台付甕、高杯、鉢(碗)、甗、小形器台、手捏ね土器が知られる。器種組成は吉ヶ谷式とほぼ一致し、樽式とは片口鉢がなく、台付甕が少ない点で異なる。片口鉢はその用途に興味のあるところだが、他の後期弥生土器でもほとんど類例を見ないことから、むしろ樽式の特徴的な器種と捉えて差し支えないようである⁽⁵⁾。なお、壺、甕、高杯には同一形状ながら大きさによって多少の変化がみられる。これは、壺と広口壺あるいは高杯と鉢の関係に匹敵するような用途上の相違があったと考えても良いだろう。ただし、甕は後述するように、中形品というべき法量のものが圧倒的に多く、大形品や小形品はわずかである。

各器種における器形の特徴は以下の通りであり、その代表的なものを第1図に掲げた。

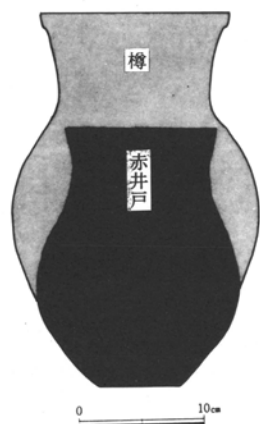
壺は、概ね球形胴にやや突出する底部を持ち、A一頸部の屈曲がなだらかで長胴のものと、B一頸部が「く」字状で球形胴のものに2分される。これは後述する甕の変化と同様にA類→B類の時間的変遷を示すものと考えたい。なお、小島氏の分類によれば、折り返し状の有段口縁、粘土帯を強調する多段口縁、素口縁の3種の変化が見られるという。ただし氏が壺C類として掲げた素口縁の土器は、赤井戸式本来の器形とは考えにくく、むしろ頸部の凸帯や、無文である等の特徴から弥生時代末～古墳時代初頭の外来系土器あるいはその影響を受けて成立した新たな器形と捉えるべきである。従って、赤井戸式本来の壺の大部分は口縁有段化と施文が一般的であったと考えて良いだろう。なお、吉ヶ谷式には粘土帯を強調して凸帯状に加飾する口縁文様が発達するが、赤井戸式には見られないようである。また吉ヶ谷式の古い段階に見られるいわゆる耳付土器も、現在のところその存在を知らない。大きさは高さ20～30cmの中形品が多いが、勢多郡粕川村堤頭遺跡6号住居跡⁽⁶⁾、新田郡新田町台遺跡7号住居跡⁽⁷⁾、勢多郡新里村峯岸山遺跡第1次調査1号住居跡等⁽⁸⁾では高さ50cm前後の大形品が知られる。

甕は、胴中位に最大幅を持つ「^{なづめ}棗」形で、頸部の屈曲度から3種に分けられる。そのうち、く

びれの少ないA類は口縁から胴上半にかけて粘土帯接合痕を残すものが多い。一方、「く」字状に強く屈曲するC類は接合痕を残さないか、口縁部にのみ見られる事が多い。ただし、これは外見上の相違に止どまらず、成形技法の違いをも示している。すなわち、前者は屈曲の少ない口縁～胴上半を成形するために連続して粘土帯を積み上げたものであり、後者は胴上半～肩部と口頸部を分けて成形した結果であると考えられる。また、A類に比べてC類には球形胴が多いが、この形状を成形するにも胴下半、胴上半、口頸部と3段階に分けて接合するのが合理的かつ一般的な方法であったと解釈される。

このA～C類の形状変化はA→C類の時間的推移と考えられ、柿沼幹夫氏によれば吉ヶ谷式でも同様の変遷を辿ることが明らかにされている。⁽⁹⁾ 弥生時代中期～後期の平底甕の器形変化には、楠描文系の竜見町式から樽式への変遷に代表されるように、多くは肩の張る長胴形から球形胴への変移が見られる。その主な理由としては煮沸効率の向上を目指した結果と理解されている。⁽¹⁰⁾ この解釈は机上論的で、はたして実際の使用状況において実効が得られたのか疑問な点もあるが、炉内での設置方法や火の焚き方等も含めて、より効率的で、調理方法の変化に適合した器形を試行錯誤によって漸次改良していった事は容易に想像できる。これを赤井戸式の甕に照応させた場合、C類は最も煮沸効率の高い形状と考えられ、A類はその前段階と捉えられよう。従ってA～C類の変化は、煮沸効率向上の各段階を示すものとの仮説も成立つ。ただし、最終段階のC類に見られる「く」字状に屈曲する頸部と球形胴を組み合わせた器形は、内在的發展と捉えるよりも、むしろ新たに接触を持つことになった外来系土器の影響が大きいと考えられるところから、排他的な土器の変遷過程ではB類が最終段階の器形だとすべきだろう。

なお、甕の大きさに関しては中形品が大部分を占めており、大形品と小形品の少ない事が全体の傾向として捉えられる。堤頭遺跡、峯岸山遺跡、前橋市内堀遺跡群下縄引遺跡から出土した代表的な赤井戸式甕の70点について、口径を2cm単位、器高を4cm単位に分割してそれぞれの出現頻度を調べたところ、口径は10～14cm、器高は12～20cmの範囲に集中するとの結果を得た。また



第2図 甕の比較モデル

遺存状況の良好な樽式の甕100点についても同様の分析を行ったが、口径は14～18cmでピークを示し、器高は12～16cm、20～24cm、28～36cmの3法量に集中する傾向が見られた。これは分析対象を住居出土品に限っていないことや、器高データが少ないとの資料的制約から厳密な統計比較によるものではないが、ここで得られた最も出現頻度の高い数値から赤井戸式と樽式の法量モデルを想定し、模式的に示したのが第2図である。これによれば赤井戸式の甕が樽式の一般的な中～大形品と比べて、いかに小規模であったかが看取される。煮沸用の土器である甕のみで軽々に即断すべきではないが、赤井戸式の甕が樽式と比べて少量の食物しか調理できないとすれば、その背景には大容量の甕を必要としない食糧事情の貧弱な状況が存在し

たとは考えられないだろうか。もとより、当時の調理法は甕の煮炊きに限ったものではないが、米を主食と考えた場合、その主要調理具である甕の容量の大小は、その集団の生産力を微妙に反映した結果と捉える事も可能⁽¹²⁾だろう。また、樽式と異なって法量がほぼ単一なことは、用途差に応じた器種分化が十分に発達していなかったことを示すものとも考えられよう。

台付甕は少数ではあるが、内堀遺跡群下縄引遺跡や新里村天笠南遺跡⁽¹³⁾等で存在が知られる。器形の特徴は平底甕に準ずるが、内堀遺跡群下縄引遺跡のH-1号住居例（第1図-10）は、共伴した樽式の小形台付甕とほぼ同形状を示す点で、樽式土器との強い関連性が窺えるものである。

壺、甕以外の主要器種としては鉢と高杯があげられる。これらは口縁文様の有無以外には形態の差は少なく、比較的安定した器形を保っている。これは、機能的にも装飾効果の点でも変化を生み出すだけの要素が少なかったことによるものだろう。また、粘土帯接合痕を強調した多段口縁（第1図-11）や天笠南遺跡34号住居例のように杯部が深く内彎するものは、素口縁で単純に開くものより古い要素と捉えられるが、吉ヶ谷式に発達したような口縁や脚部接合部分における凸帯装飾は見られない。

⁽¹⁴⁾ 甕は円錐形の器形が知られており、新里村峯岸遺跡16号住居例⁽¹⁵⁾（第1図-13）、粕川村西原遺跡⁽¹⁶⁾例、内堀遺跡群下縄引遺跡では幅広の折り返し状有段口縁に縄文を施している。他には新里村峯岸山遺跡第2次調査3号住居例⁽¹⁷⁾のように無文の多段口縁も見られる。

小形器台は、赤井戸式の系譜上にはない外来系の器種であるが、最新段階では無文化の進んだ壺や甕とともに主要組成器種として定着する。堤頭遺跡14号住居例では器受部と脚部が同一形状（第1図-15）を呈しており、また天笠南遺跡6号住居例では脚部に直径3ミリほどの小さな穴を2個一対で穿孔する等、定型化していないものも見られるが、これらは採用の初期段階のものと考えられよう。

また小形器台と同様に、実用容器とは考えにくい儀器的な器種として手捏ね土器や小形鉢等も新たに加わった組成要素と考えられる。手捏ね土器は実用器を模倣した甕や鉢形品が知られている。一方、小形鉢（第1図-14）は甕の形状に似るが、土師器のメルクマールでもある小形丸底⁽¹⁸⁾ 罎が定着する以前に、器台と組み合わせるべく生み出された新しい器形と解釈しておきたい。

広口壺は堤頭遺跡で1例知られるのみで、一般的な器種とは考えにくく、特殊な用途に用いたことが推定される。

以上述べたように、壺と甕については時間的推移を示すと想定される器形の変化が見られた。そして器種組成については、隣接地域で同時期に存在する樽式土器とはやや異なることを示した。吉ヶ谷式との関連でいえばほぼ同一の器種組成と器形変化を示すが、埼玉県坂戸市花影遺跡⁽¹⁹⁾例のような古段階と考えられる頸部のくびれのほとんどない甕は、赤井戸式では稀であり、ここではとりあえずA類に含めて扱った（第1図-4）が、本来的にはA類より前段階に位置付けられるものだろう。このことが、赤井戸式の開始を吉ヶ谷式よりも新しく位置付ける理由ともなり得るが、ここで取り扱った資料の大部分が赤井戸式のなかでも新段階のものであることは注意すべき

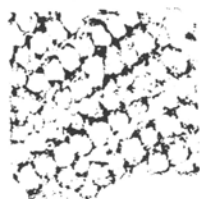
であり、単体ではあるが太田市小丸山遺跡の壺（第1図-1）のように吉ヶ谷Ⅰ式⁽²⁰⁾に近似する器形も見られることから、これに相当する古段階の甕が存在することは十分に考えられるだろう。

3 文様について

赤井戸式土器の文様は縄文と、強調された口頸部の粘土帯接合痕に集約されており、このことについてはすでに先学である園田、小島両氏の論文に詳しい。このうち縄文については、赤井戸式を特徴付ける最も重要な型式要素として評価される。従ってここに見られる縄文の特徴を適確に把握することによって、他の型式との弁別や類縁関係の検討が初めて可能になるといっても良い。かつて園田氏はこの縄文の特徴について「段状縄文」と命名し、当初それを「原体を力強く押さえて帯状に回転押捺し、輪積み技法の如く反復したために、縄文の配列が段状を呈したもの」⁽²¹⁾との解釈を示した。これに対して小島氏は、その後の報告等での園田氏の捉え方が曖昧であったことや、「段状」の名にふさわしく文様効果を伴った整然たる横位縄文がけっして一般的な存在ではないことから、これを赤井戸式の特徴として捉えることに否定的な見解を示し、更にこのような具体性を欠いた外見上の特徴を重視するのではなく、むしろ縄文原体の在り方にその特性を見い出そうとした⁽²²⁾。これは外見的にほぼ同じ文様を施す吉ヶ谷式との具体的な対比や、弥生町式、二軒屋式、あるいは中期後半の竜見町式に見られる縄文との相違を明確にするための有効な方法⁽²³⁾を示した点で評価される。

小島氏は堤頭遺跡出土土器の分析によって、赤井戸式の原体は90%近くが単節であり、0段の基本撚1とrがほぼ6対4の比率で存在することを明らかにした。また、無節や異束もわずかながら存在する点や、附加条が見られないことによる十王台式との相違も指摘している。ただし、ここに示された傾向は堤頭遺跡に限った現象であるとして理解するべきで、赤井戸式の一般傾向として捉えるには他遺跡での検証を必要とした。

赤井戸式分布圏のなかでは最南端にあたる佐波郡境町の下淵名塚越遺跡⁽²⁴⁾では、樽式・赤井戸式・二軒屋式・十王台式と各地域の後期弥生式土器が混在して出土しており、盛んな地域間交流の実態を反映したものとして注目されるが、その中で胎土や器形、施文方法の特徴から赤井戸式と判断された土器片83点について原体の分類を試みた。その結果、単節は過半数の50%強を占めたが、堤頭遺跡では認められなかった複節と推定されるものが30%、更に複雑な複々節についても8%程存在することが判明した。ただし、この中には明確に複節と解るもの以外に一見単節に見えるものを多く含んでいる。これは、長径3ミリ大の節の中に細長い節が数条並列するもので、当初は太く粗い束と考えていたが、顕微鏡観察によってほぼ同一の太さで規則正しく並ぶこと、細かい撚りのかかっているのが確認されたこと（第3図参照）から、これらを独立した節であると判断した⁽²⁵⁾。この場合、0段では太さ1ミリ弱の撚糸を数条用いたと推定するものである。つまり、この大きな節に見られる数本の条をどう考えるかによって、複節と単節に判断が分かれることになる。従って、これを単節と見た場合には小島氏とほぼ同じ結論となる可能性が高い。太い束を



上は原寸拓影
右は4倍図に
顕微鏡観察の
スケッチを補
筆。



第3図 赤井戸式特有の複節

撚り合わせた場合でも節の中にはっきりした条が見えるが、これには縦の繊維痕が往々にして見られ、しかも不均等な現れ方をする方が多いようであり、ここで確認されたものとは異なる。ただし、この特徴的な縄文原体を赤井戸式特有のものとして捉えるには相当量の土器観察による統計的处理が必要であり、現段階ではわずかな資料の比較による見通しを述べたに過ぎない。従って複節か単節かを問題とするよりも、今まで単節として一括に扱われてきた縄文の節の中に、糸とも推定され

る整然とした条が並ぶことを特徴とする原体が相当数存在することを新たに認識すべきことを指摘するに止めておく。なお、これと同様な複節の存在については、赤井戸式の標識遺跡となった峯岸山遺跡でも確認されており、また複節に限らず僅かな存在とされていた無節や異束も、天笠南遺跡や下縄引遺跡等幾つかの遺跡で確認されることから、少数ながらも基本的な原体のひとつであると捉えられよう。このように、赤井戸式の縄文原体の特徴は、単節だけに代表されるといった理解だけではなく、単節を基本としつつ主に撚りの回数を反復する事で幾つかの多様性を生み出したと考えられる。小島氏も指摘したように、この点で軸縄とそれに付加する縄によって変化を求めた二軒屋式、十王台式との間に差異を見いだすことが出来る。

縄文と共に赤井戸式の重要な文様要素として注目されて来たのが、口縁～頸部における装飾的な粘土帯接合痕である。基本的な文様として定着していたことは、ほぼ全器種に採用されていることや末期段階にまで多く見られる点からも明らかである。赤井戸式には見られないが、吉ヶ谷式では粘土帯を更に誇張することで凸帯文にまで発達を遂げた。しかし、赤井戸式を見る限り、これを独立した代表的文様として過大な評価を与えることはできないように思われる。これは文様としてのみ捉えるのではなく、器形と密接に関連する成形技法としての側面も考慮する必要があることは前節で述べた。壺のそれは、単純な折り返し口縁から生まれた多段化による一変形状態として捉えるべきで、また甕については縄文施文によってその文様効果がほとんど失われているのが実態だからである。これについては、効果的な文様としての接合痕がむしろ縄文を施さなくなる末期段階に多いことから窺うことができる。これと同類の文様は、関東地方各地の後期弥生式土器にもそれぞれの態様で見られることから、赤井戸式独自の特徴と捉えるよりも、むしろ広範囲に波及した一般的な技法と考えるべきだろう。このことから、その出自や変遷過程についての説明は、単一型式の系統的理解だけでは不十分であると言える。

4 赤井戸式土器の祖型

さて、前節において器形や文様に見られる赤井戸式の緒特徴を再確認してきた。では、この特

徴が系統的にどこまで遡り得るのだろうか。それを探る手掛かりとして、まず園田、小島の両氏が古段階と想定した土器の特徴について再検討をしてみたい。園田氏は、「段状縄文」や明確な粘土帯接合痕等の装飾要素を重視して壺・甕ともにこれらの定型化した文様が見られるものを古く想定した。器形⁽²⁷⁾については撫で肩の壺を古段階と考えているが、甕の分類に窺えるように器形よりも口唇部における縄文施文の有無等を新旧判断の優先基準としている傾向が強いように見受けられる。一方、小島氏は器形と文様の組み合わせの変化で組列上の先後関係を検討しているが、頸部屈曲の弱いものを氏の分類による壺Aでは古く、壺Bでは新しく見ているように、やはり文様要素の多いことを古い段階の特徴として捉えているようである。具体的には峯岸山遺跡（第1次）6号住居例をI期としており、肩部のなだらかな壺を図示している⁽²⁸⁾。ただし、この時期における資料が十分でないことから、その特徴についての具体的説明を避けた。また両氏は、新旧の序列を与えるための明確な変遷基準については説明をしていないが、概ね縄文を主とした文様要素の確立から、形骸化あるいは簡素化への傾向を変遷の底流と捉えていることが窺える。これは総論的には認められるのだが、では古期とした文様が何から変化して、どのように変遷するのかという具体的な文様の系統的理解が示されなかったために、説得力のある理由にはならなかったと考えられる。では一体、古段階の器形や文様、あるいはその祖型をどのように想定したら良いのだろうか。

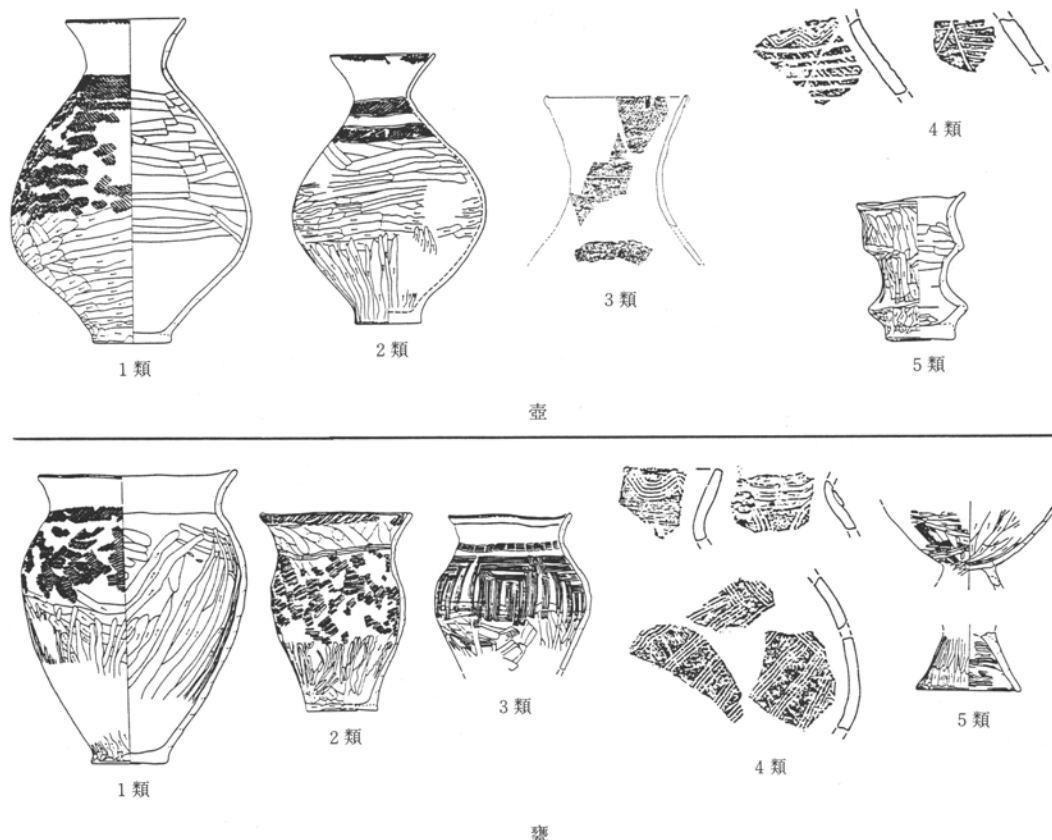
本来、新旧関係の把握には層序や遺構重複関係に基づくのが望ましいが、赤井戸式はそのような条件を満たす良好な資料がほとんど見られないことから、器形や文様等の形態上の特徴を比較することによって導き出さなければならない。そこで、時間的変遷把握のための仮定条件を前節における器形と文様の検討から以下のように想定した。

- ① 甕の器形は、肩の張る長胴形→下膨れ形→「く」字状頸部・球胴形の順で変遷する。
- ② 壺の器形は、長頸・撫で肩→短頸・球胴形→「く」字状頸部・球胴形の順で変遷する。
- ③ 文様は、単調→多様化→形骸化・簡素化と変遷する

①は既に述べたように煮沸効率の向上とも解釈される機能的側面を重視し、②は文様が次第に簡素化されることによってその施文部位が口縁～胴上半から口縁と肩部に集約されるとの解釈、③は縄文、粘土帯接合痕とも一元的なものから多様な変化を生じ、やがて本来の意義を失っていくとの解釈に基づいている。また、後半段階では古墳時代初頭における外来系土器の影響も考慮する必要があり、器形に見られる「く」字状頸部と球胴形への変化や無文文化はその最も明敏な現象として捉えられる。

以上の前提を基に想定される赤井戸式の祖型像は、肩の張る長胴形の甕と、長頸で撫で肩の壺で構成され、いずれも単調な縄文を施文するものと考えられる。ではこの祖型像に合致するような土器が実際に見られるだろうか。ここで、赤井戸式よりも古いことが明らかな中期後半の土器群を参考にしながら赤井戸式の祖型を検討してみたい。

まず赤井戸式の祖型の最大公約数的条件として、縄文を主たる文様要素とすること、甕は平底



第4図 荒砥北三木堂遺跡出土土器

が主であることを上げたい。群馬県西部に広く分布する中期後半の竜見町式は、縄文を地文様として持つが、甕に顕著に見られるように櫛描文が圧倒的優位に立っており、縄文は次第に失われる傾向にある。それは後期の樽式にも受け継がれ、ここでは縄文は全く姿を消してしまう。また、南関東に分布の中心を持つ宮ノ台式は、主文様として壺に縄文を施すが、甕は条痕やハケ目が主流となっている。また、東北地方南部から茨城県にかけての地域では壺、甕ともに縄文を多用するが、壺は胴下半の地文として発達し、上半は沈線文や櫛描文が一般的である。以上のように関東地方北部とその周辺で知られている代表的な中期後半の土器は、いずれも赤井戸式の祖型と想定するには異質な要素が多すぎる。またその直後の後期前半の土器をみても、吉ヶ谷式以外にその条件を満たすものは見られない。ここで注目されるのが、赤城山南麓⁽³⁰⁾に分布する独特の特徴を持つ中期後半の土器群である。これは、前橋市荒口前原遺跡で最初に発見されて以来、調査者でもある柿沼恵介氏によって竜見町式とは一線を画すべきものとして捉えられてきた。その内容は竜見町式と東北地方南部の土器の要素が混在し、これに縄文施文の土器が加わるものである。氏は在地系とした縄文系土器に搬入された竜見町式と東北地方南部の土器の影響を強く受けて成立した独自の土器群であると解釈しており、竜見町式を総括した設楽氏もこの考え方を支持して

いる。⁽³¹⁾一方、荒砥前原遺跡出土の同様の土器群を検討した平野氏は、これを竜見町式の外縁分布地域における地方色と解した。⁽³²⁾筆者もこの土器群について、竜見町式を母胎にして成立したものであるとの見解を示したことがある。⁽³³⁾このように論者によってその評価はやや異なるが、この土器群の一部を構成した縄文系土器が、赤井戸式の祖型の最有力候補として取り上げられることとなったのである。

小島氏は、赤井戸式の編年案を示した後、粕川村堤頭遺跡の報告の中で中期後半における縄文施文の甕をいくつか掲げてその有力な候補とした。⁽³⁴⁾また、筆者も前橋市荒砥前原遺跡のなかで系譜の不明な縄文系土器が多く見られることから、竜見町式とは異なる土器群の存在を予想したが、⁽³⁵⁾土器群のなかではいずれも客体的な存在であり、器種も限られていたことから、これらを赤井戸式の祖型として検討するのは尚早と考えられた。また、柿沼氏は縄文系土器を在来系と捉えたが、赤井戸式の直接の祖型とは考えず、むしろこれが分裂して吉ヶ谷式の母胎と同化する可能性があるとの解釈を示した。⁽³⁶⁾いずれにしてもこの縄文系土器が赤井戸式の祖型を解明する重要な鍵となる土器であったにも拘わらず、その検討が十分に行われなかった原因としては、全容を知り得る確実な資料の少なさに負うところが大きかった。ところが、荒口前原遺跡と近接する荒砥北三木堂遺跡で、従来には見られなかった縄文系土器を構成主体とする土器群の存在が明らかになり、⁽³⁷⁾はじめてこの土器を詳細に検討する機会が与えられた。この土器群は5軒の堅穴住居から出土した一括資料で、いずれも弥生時代中期後半に位置付けられるものである。個々の詳細については報告に譲るとして、ここではその概要について述べておこう。

文様を含めた形態的特徴から、壺は5類、甕は台付甕を含めて5類に分類される(第4図)。そのうち、壺1類、甕1類は縄文のみを施文する点で、本土器群の特徴を最も良く表している。甕1類が主体的な位置を占める点も重要であるが、胴上半全体に縄文を施す壺1類は、竜見町式の範疇では捉えられない初発見のものとして注目に値する。又、量的に主体を占める壺2類は沈線区画の縄文帯をもつことで、竜見町式や宮ノ台式に近似するが、折り返し口縁で長頸、長胴の器形は両者の中間的なもので、これも本土器群の特色である。主体を占める甕1類は、短く外反する口縁と肩の張る長胴形が特徴で、口唇部と同上半に横位縄文を施す。なお、これに近似した例は長野県の栗林式や東北地方南部にも見られる。又、壺・甕ともに竜見町式に属する櫛描文土器も散見するが、これらは少数の客体的な存在である。甕2・3類は両者の折衷ともいえるもので、これは赤城山南麓の地域的特色として捉えられるものである。他の器種としては、蓋、台付甕、鉢(甑の可能性もあり)も見られるが、全形を知り得るものはない。本遺跡出土土器の意義は、在地系と言われながらもほとんど不明であった縄文施文の土器群の型式的内容が明らかにされたことであり、竜見町式とは全く異質な土器系統の存在を確実にしたことである。

群馬県内では同様な縄文系土器の出土地として、前橋市荒口前原遺跡、同荒砥前原遺跡、同荒砥島原遺跡、⁽³⁸⁾同清里庚申塚遺跡、⁽³⁹⁾伊勢崎市西太田遺跡、⁽⁴⁰⁾粕川村西迎遺跡、⁽⁴¹⁾新里村峯岸遺跡、笠懸町和田遺跡等⁽⁴²⁾が知られる。

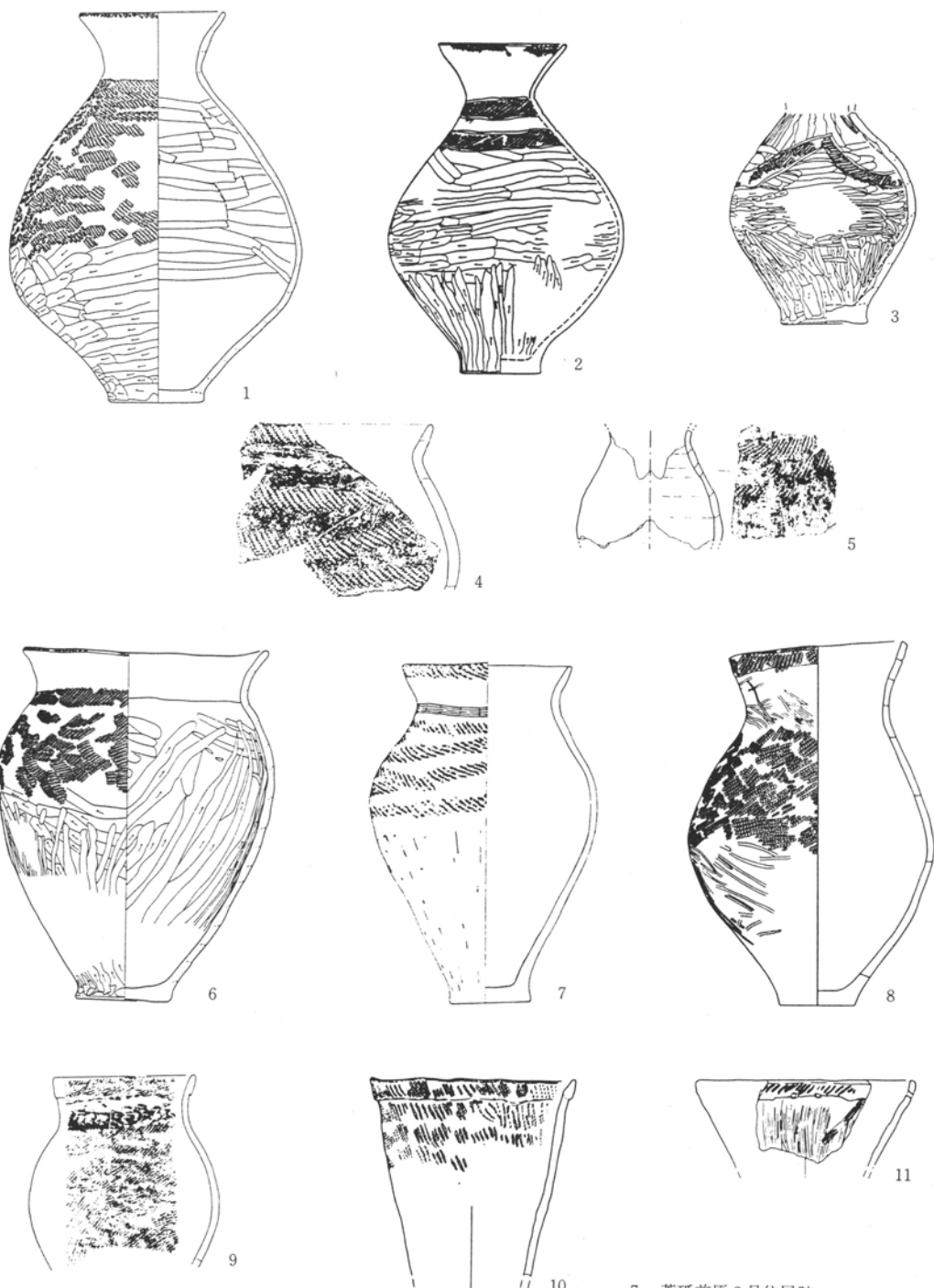
これらの群馬県内における縄文系土器の内容と特徴について、北三木堂遺跡の土器を中心に総括を試みる（第5図）。まず器種としては、壺、甕、台付甕、広口壺、鉢、蓋が知られているが、甕以外の器種は同時期の竜見町式や宮ノ台式と類似する点が多い。換言すれば、縄文のみを施文する甕の存在こそがこの縄文系土器群を他と弁別する最も大きな特徴といえる。

甕の形状は、短く開く口頸部と肩の張る長胴形で、口縁と体部上半に粗い縄文を施すのが共通する特徴である。口縁部形態は、「く」字状に屈曲する素口縁（1）、やや曲線的に屈曲して内湾気味に開くもの（2・3）、折り返し口縁（4）の3者が見られる。これは栗林式や竜見町式の甕にみられる素口縁と受け口状口縁の2態の存在とも符合する様相であると考えられよう。この3者が、同時に存在する形態上のバラエティーなのかあるいは単一系統上に位置する時間差による変化と見るべきかは、分析資料の稀少な現段階では明確にし難い。時間差と見た場合には、これら縄文系土器を新旧2時期に分けられる可能性があるが、今後の資料の増加を待つて将来の検討課題としておきたい。⁽⁴³⁾

壺は、弱く「く」字状に屈曲して漏斗状に開く短い口縁と、最大幅が胴中位付近にあり底部がやや突出する形状を持つ。口縁形態は弱い折り返しのものが目立ち、竜見町式に見るような受け口や「朝顔形」に大きく開くものは見られない。文様は口縁と頸～肩部に縄文のみ、沈線区画の充填縄文、沈線による連続山形文や工字状文と縄文の組合せ等の幾つかのバラエティーがある。荒砥北三木堂遺跡の壺1類（5）とした縄文のみを施文する例は、現在までのところ荒砥前原遺跡⁽⁴⁴⁾5T3号竪穴例以外に類を見ない。形状の特徴は、内湾気味にくびれる頸部と下膨れの形状を基本形とする竜見町式と異なり、胴下半が内湾気味で頸～肩部がやや膨らみを持つものである。特に小さい底部が強く突出する点は他と比較して目立つ特徴である。広口壺（9）は荒砥前原遺跡で1例見られ、多段の横位縄文を間隔をあけて施文している。このうち北三木堂遺跡壺2類は、器形と文様の特徴から壺1類より古く位置付けられる可能性がある。

鉢は、くびれない深鉢が峯岸遺跡（10）と西太田遺跡で、甑の可能性のある浅鉢が峯岸遺跡（11・12）、北三木堂遺跡から出土している。いずれも口縁ないしは口縁～体上半に縄文を施すものである。弱い折り返しか受け口状の口縁が特徴といえる。

以上に示した縄文系土器群は、竜見町式や宮ノ台式と同時代的な近縁性を持ちながらも、縄文施文に固執した各器種から構成されていることが明らかとなった。このことは、赤城山南麓の土器群の理解について、一括概念で捉えるのではなく、むしろ竜見町式と縄文系土器群がそれぞれ異なる系統の土器群として併存しており、両者が互いに密接な交流を保持し、またこれに東北地方南部や南関東地方の文化圏とも接触することで、それぞれの土器の特徴が混在するに至ったと考えられるのではないだろうか。確かに柿沼氏が指摘したように、この地域では両者のこれらの要素が混在する様相を示す遺跡が一般的であり、それを地域の特色として捉えたのは重要だが、一方で混在のない純粋な型式内容とその様態を捉える事も、この地域の集落形成や展開過程を解明する上で必要な作業だろう。この点で同一地域での集落遺跡ではあるが、荒砥北三木堂遺跡は⁽⁴⁵⁾



- 1 荒砥北三木堂44号住居跡
- 2 荒砥北三木堂31号住居跡
- 3 荒砥北三木堂31号住居跡

- 4 荒砥前原 5 T 2 号住居跡
- 5 清里庚申塚10号住居跡
- 6 荒砥北三木堂31号住居跡

- 7 荒砥前原 2 号住居跡
- 8 西迎20号住居跡
- 9 荒砥前原 5 T 3 号竪穴
- 10 峯岸12号住居跡
- 11 峯岸23号住居跡

第5図 中期後半の縄文系土器

混在要素の少ない土器の様相から、他遺跡とは集団の性格を分けて考えるべきかもしれない。

この縄文系土器群を弥生時代中期後半における新たな一型式として設定するには、これを主体とする遺跡が荒砥北三木堂遺跡以外には明らかでないこと、分布の特性を把握するための資料が不十分であること、これの祖型となる土器群が十分に特定出来ないこと等から、現段階では時期尚早と考える。その祖型となるべき土器の系統についても、まだ不明な点が多く今後の検討が不可欠であるが、笠懸町鹿の川遺跡からは、北三木堂遺跡壺2類に先行すると思われる類似器形を持つ土器が出土しており、これと同様の野沢系と呼ばれる縄文の卓越する土器群が最も近いとの見通しを持っている。又、地域がやや異なるが須和田式新段階に位置付けられている埼玉県熊谷市池上遺跡の甕4類⁽⁴⁶⁾や邑楽郡板倉町板倉で須和田式の壺と共に採集された甕も口縁～体部の大部分に縄文を施す点で注目しておくべきだろう。ただし、関東地方における中期中葉までの土器には東半部を中心に縄文施文は一般的な文様手法として存在し、明確な地域色が確立されていない段階である事を考慮すれば、前代の土器に系譜をたどれたとしても、北三木堂遺跡に見られる独特な縄文系土器の成立は、土器型式や分布圏における地域色が確立する中期後半以降に求めるべきであろう。

さて以上に述べたように、赤城山南麓地域に分布する土器群の中で縄文施文を主な特徴とする土器を抽出し、これらがひとつの型式的まとまりを持つ土器群であることを明らかにしてきたが、では、これらと赤井戸式土器はいかなる関係にあるのだろうか。壺の器形は、赤井戸式の想定祖型に近いが、沈線区画の縄文帯や沈線の文様構成は赤井戸式には見られない。ただし、これは荒砥前原遺跡例（第5図－9）や清里庚申塚遺跡10号住居例（第5図－5）のような横位縄文帯のみを肩部に巡らせた壺を中間に置くことで、沈線が漸移的に失われていったと解釈できるのではない。甕は、荒砥北三木堂遺跡で主体を占めた素口縁で肩の張る器形のもの⁽⁴⁷⁾と西迎遺跡例のように折り返し口縁で長胴のものが⁽⁴⁸⁾あり、赤井戸式の祖型としては後者が近似する形態を持つが、頸部にみられる無文帯は赤井戸式にはない。また、縄文の特徴は口縁～胴上半部に施文部位が限られており、単純な斜縄文を施す点で酷似する。更に前節で触れた特徴的な複節が荒砥北三木堂遺跡でも同じように見られることから、縄文原体の点でも両者の関連性を窺わせる。以上の比較から、これら縄文系土器群は僅かな相違点を除いて、赤井戸式の祖型として最もふさわしいと考えられる。その相違点については、壺でみたように、中間に漸移的形態の土器を介在させて解消することができると考えられる。甕では、これに相応する資料が明らかでないが、高崎市新保田中村前遺跡の2号河川跡出土の甕は、⁽⁴⁹⁾ほぼくびれの⁽⁵⁰⁾ない器形ながら口唇と体部上位に横位縄文を施し頸部を無文とする点で、両者の中間に位置すべき形態といえる。このように僅かではあるが、縄文系土器群と赤井戸式土器を結ぶ土器の存在が想定されるならば、恐らく本地域の土器編年において中期後半から赤井戸式末期の古墳時代初頭まで縄文施文土器の系譜が途切れる事なく続くと推定されるのである。

5 結 語

以上の分析で、赤井戸式土器の祖型が同地域に分布する中期後半の縄文系土器に求められ、この土器の系統が古墳時代初頭まで続くであろうことを述べた。このことは、最初に触れたように当地域の編年上の空白部分を埋めるばかりではなく、吉ヶ谷式との関係を大幅に見直すことにもつながる。これによれば、赤井戸式土器が埼玉県中部に分布する吉ヶ谷式から派生したとする一元的解釈では理解出来ないのは明らかで、その逆の成立過程や同一祖型から二地域に分裂してそれぞれで形成・展開した可能性も検討する必要があると言えよう。吉ヶ谷式の祖型については、池上遺跡の甕4類を想定する説もあるが⁽⁵²⁾、壺や他の器種を含めた土器群総体と比較した場合に型的な不連続性が認められ、直接的につながるものとは考え難い。むしろここに示したような縄文系土器群を中間に介在させることによってより合理的に系統的な変遷過程を理解することが出来るのではないか。ただしこのことから直ちに、吉ヶ谷式が赤城山南麓地域における縄文系土器から発生したと限定するものではなく、むしろその同一祖型となるべき縄文系土器群の分布をより広範囲に想定し、やがて二地域に別れたと解釈しようとするものである。赤井戸式との比較で触れたように、かなり早い段階から凸帯の発達や口唇部の刻み等、吉ヶ谷式独自の特徴が見られることは、それが周辺地域における他の土器の影響によるものだとしても、一時的な変異ではなく一般的特徴として定着していることから、単なる地域色として解釈すべきものではなく、両者がそれぞれの地域で独自の発展過程を辿った結果と考えるべきではないか。又、栃木県に分布する赤井戸式もこれと同様に解釈できる可能性がある。ここでは残念ながら良好な比較資料に欠けるが、佐野市堀米遺跡で出土した壺は赤井戸式でも古段階に位置付けられるものであり、また、宇都宮市御新田遺跡⁽⁵³⁾での中期に位置付けられる縄文施文土器の存在は、ここで見られる赤井戸式土器の母体ともなりうる可能性を示唆しているのではないだろうか。

以上に述べた赤井戸式土器及び吉ヶ谷式土器成立の解釈は、あくまでも憶測の段階であり、その祖型となる土器群の具体相を更に明確にし、また両者の属性の比較研究が進んだ時点で解明すべき課題ではあるが、少なくとも、ここに見られる縄文系土器の中期から後期に至る分布の様相や動態は、定着、拡大、分散を繰り返すことによって次第に領域を増大していったとの画一的な発展過程では解釈できないものであり、むしろかなり小規模な集団が競合集団の存在しない地域を選んで広範囲に散在し、閉鎖的な小社会を守り続けたとの印象を強く持つ。それは、縄文を頑なに守り通した保守性の強い土器作りや生産力の脆弱性、停滞性を示す赤井戸式甕の様態などに如実に表れているのではないだろうか。

以上、赤井戸式土器の遡源をテーマに憶測ともいえる拙い見解を述べさせて戴いたが、園田、柿沼、小島各氏の業績に対しては、浅学のためその意とするところを十分に理解せずに批判させて戴いたとの危惧を感じる。筆者の曲解によるものであればお詫び申し上げたい。最後に、貴重な資料を快く拝見させて下さった内田憲次氏、小宮俊久氏、小島純一氏、前原 豊氏、そして有益なご意見を戴いた佐藤明人氏、相京建史氏、藤田典夫氏にはここに記して感謝の意を表したい。

註

- (1) 小島純一「赤井戸式土器について」『人間・遺跡・遺物—わが考古学論集—』1983
- (2) 園田芳雄「峯岸山遺跡発掘調査報告（第1次）」新里村教育委員会1975 a
園田芳雄「峯岸山遺跡発掘調査報告（第2次）」新里村教育委員会1975 b
- (3) 井上唯雄・柿沼恵介「入門講座 弥生土器—関東 北関東 4」『考古学ジャーナル』145 1978
- (4) 前掲註1 文献小島純一1983に同じ
- (5) 外山氏によれば、片口鉢は樽式になって出現し、食膳用として用いられたと推定されている。外山和夫「弥生土器の形と用途」『季刊 考古学』第19号 1987
- (6) 小島純一『堤頭遺跡』群馬県勢多郡粕川村教育委員会 1988
- (7) 須田 茂『台遺跡』新田町教育委員会 1988
- (8) 前掲註2 文献園田芳雄 1975 aに同じ
- (9) 柿沼幹夫「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号 1982
- (10) 中村倉司「弥生時代における甕形土器の煮沸方法と熱効率」『考古学雑誌』73巻2号 1987
- (11) 園部守央・加部二生『内堀遺跡群II』前橋市教育委員会 1989
- (12) 中期の甕は後期に比べて法量の大きいものが主であるが、これは器形の特徴や甕の使用法とも併せて煮沸物や煮沸方法の相違を想定すべきかもしれない。従って、法量と調理量を正比例の関係で捉えるには、同一の食糧で同一の調理技術によることが前提であり、ここでは同時代の樽式と赤井戸式を比較した。
- (13) 内田憲次『天笠南遺跡—図版編—』新里村教育委員会 1981
- (14) 最近では「蒸し器」としての実用に疑問が出されているが、器形と用途が一致しないのは、壺や甕でも同様に見られる。ここではとりあえず形態名称としての「甕形土器」の略称で「甕」を用いる。
- (15) 内田憲次『峯岸遺跡』新里村教育委員会 1985
- (16) 前掲註1 文献小島純一 1983に掲載
- (17) 前掲註2 文献園田芳雄 1975 bに同じ
- (18) 器台は本来、底部不安定な壺や鉢等の器種と組み合わせられたと考えられるが、東日本に伝播した際に、組み合わせ器種を伴ってもたらされたかどうかは疑わしい。少なくとも全国的な斉一性を持つ小形丸底土器（小形埴）が定着するのは古墳時代前期でも新しい段階であり、それ以前でこれに匹敵するものを抽出すれば、平底の小形鉢が最もふさわしいと考えられる。
- (19) 谷井 彪『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』埼玉県教育委員会 1974
- (20) 前掲註9 文献柿沼幹夫 1982による
- (21) 園田芳雄『桐生市およびその周辺の弥生式文化』1966
- (22) 前掲註1 文献小島純一 1983に同じ
- (23) ただし、現状では竜見町式に見られる縄文の原体についての研究はほとんど行われていない。
- (24) 大木紳一郎・飯田陽一『下淵名塚域遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (25) 原体復元には原 雅信と石坂 茂両氏のご教示によるところが大きい。
- (26) 前掲註2 文献園田芳雄 1975 b『峯岸山遺跡発掘調査報告書（第二次）』掲載の第2図—1 広口甕の縄文原体はRLRと考えられる、筆者実見。
- (27) 前掲註2 文献園田芳雄 1975 a・bに同じ
- (28) 前掲註1 文献小島純一 1983に同じ
- (29) この時期の主要な外来系土器としては、東海地方西部の土器群があげられ、S字状口縁台付甕以外にも素口縁で頸部が「く」字状に屈曲する甕が見られる。また、頸部が「く」字状に屈曲する器形は近畿地方を中心に関東地方より遥かに早く出現している。
- (30) 1957・1969年に群馬大学が調査。柿沼恵介「荒口前原遺跡」『まへあし』第14号 1973
- (31) 設楽博己「竜見町式土器をめぐって」『第7回三県シンポジウム資料 東日本における中期後半の弥生土器』1986
- (32) 平野進一「群馬県荒砥前原遺跡—赤城山南麓における弥生時代中期から後期にかけての住居跡とその遺物について」『信濃』22—4 1976
- (33) 大木紳一郎「群馬県東部における弥生時代中期後半の土器について」『創立十周年記念論集 群馬の考古学』1988
- (34) 前掲註6 文献小島純一 1988に同じ
- (35) 大木紳一郎「弥生時代の遺構と遺物（遺物）」『荒砥前原遺跡 赤石城址』(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (36) 柿沼恵介「弥生文化の伝播と展開」『群馬県史 通史編1 原始古代1』1990
- (37) 石坂 茂「荒砥北三木堂遺跡」(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (38) 石坂 茂「荒砥島原遺跡」(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (39) 相京建史「清里・庚申塚遺跡」(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (40) 村田喜久夫・平田喜孝『西太田遺跡』伊勢崎市教育委員会 1982
- (41) 小島純一『西迎遺跡』群馬県勢多郡粕川村教育委員会 1990
- (42) 若月省吾『笠懸村和田遺跡』群馬県新田郡笠懸村教育委員会 1981
- (43) 小島純一氏は、赤城山南麓の中期弥生式土器について時期細分を試みたが、縄文系土器の組列については明示しなかった。

- 前掲註41文献小島 1990
- (44) 前掲註35文献大木 1985に同じ
- (45) 柿沼恵介「荒口前原遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』1986
- (46) 前掲註21文献園田芳雄 1966に同じ
- (47) 柿沼氏は、野沢Ⅰ式と捉えた土器が群馬県南部に多いとしているが、その型式内容については十分な検討が行われているとはいえず、確立してはいない。前掲註36文献柿沼恵介 1990
- (48) 中島 宏『池守・池上』埼玉県教育委員会 1984
- (49) 外山和夫・津金沢吉茂『群馬県地域における弥生時代資料の集成Ⅰ』群馬県立博物館 1978
- (50) 前掲註37文献石坂 1991に同じ
- (51) 相京建史・小島敦子『新保田中村前遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (52) 富田和夫・中村倉司「埼玉県における中期後半の櫛描文土器について」『第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』1986
- (53) 前掲註21文献園田芳雄1966で紹介
- (54) 細谷正策・尾花源司『御新田遺跡・富士前遺跡・ヤッチャラ遺跡・下り遺跡』栃木県教育委員会 1987